

スポーツ系大学生の理想のコーチと自己効力感との関係

スポーツマネジメントゼミナール 1315057 松本 恋

1. 研究動機・研究目的

近年、2020年東京オリンピック・パラリンピック大会に向けて選手の強化とともにコーチの存在がますます重要になってきている。しかし、コーチへの不満や体罰による選手のストレスも指摘されている。そこで、競技年数の比較的長い大学生を対象として、大学生の考える理想のコーチ像とは何であるのか、種目特性（団体スポーツ・個人スポーツ）、個人特性（競技レベル・競技歴）、性別において理想のコーチ像に差はあるのか、自己効力感が理想のコーチ像と関係しているのかを明らかにするためにこの研究に着手する。

本研究の目的は、スポーツ系大学生の理想のコーチ像と自己効力感との関係を調べる。

1) 個人特性（競技レベル・競技歴）や種目特性（団体スポーツ・個人スポーツ）がそれぞれ異なれば、理想のコーチ像の考えに違いはあるのかを明らかにすること、2) 理想のコーチに自己効力感や男女のズレはあるのかを明らかにすること、3) 今後のコーチのリーダーシップの在り方について考察することである。

2. 研究方法

本研究の調査対象は、スポーツ系大学生男性104名、女性89名、計193名を対象とし、2018年7月から9月末までを調査期間とした。

本研究の調査項目は、1) 個人的属性（質問16項目）と2) Leadership scale for sports（5因子43項目）、3) 特性的自己効力感尺度（1因子23項目）の3つである。

本研究では統計処理ソフトSPSS. 21を使用し分析を行った。

3. 主な結果と考察

本研究は、仮説を6つ立てて研究を行った。まず、先行研究より自己効力感が高いと思われるリーダー経験の有無についての仮説は、全体の約60%がリーダー経験をしており、リーダー経験のある選手の方が自己効力感に高い値を示した。また全体的に好まれるコーチ像として、自己効力感の高い人ほど権威的行動を好まず、積極的フィードバックを求める傾向にあることが明らかになった。しかし、競技レベルで見ると、国際大会に出場している数名はコーチの権威的行動をむしろ求めていることが明らかになった。また、性別においてもトレーニングと指導、社会支援的行動において有意な差が見られたため、全員に同じ指導ではなく、個別ごとに異なる指導を展開していくことが必要だと明らかになった。このような結果から、競技レベルが高い選手は自己効力感が高いという概念は消

え、過去の経験で周りに認められたり、コーチに褒められたりすることにより、選手の自己効力感が高まるのではないかと考えられる。よって、コーチが選手にとっての理想のコーチとなることが、競技力向上につながるのではないかと考えられ、自ずと指導者が行うべき行動が見えてくるはずであると考えられる。

4. 結論

本研究は、スポーツ系大学生の理想のコーチ像と自己効力感においてどのような関係があるのか、個人的属性、LSS、特性的自己効力感の3つの尺度から、選手目線での理想的コーチの在り方について検討した。この研究目的を先行研究から立てた仮説をもとに研究を行った結果、自己効力感とLSSとの関係は、LSSの理想的コーチの特性項目において、権威的行動以外の4因子（トレーニングと指導、民主的行動、積極的フィードバック、社会支援行動）が備わっているコーチが理想のコーチといえることが明らかになった。特に社会支援行動に関しては、男女間や個人競技・団体競技において自己効力感が高い人ほどコーチに対し、社会支援行動を求める傾向にある。また、性別に関しては男性の方が女性の方よりコーチに対して上下関係のある堅い関係ではなく、コーチに対し仲間意識を持っているのではないかと考えることができる。また、権威的行動が懸念されることにおいては、どの調査もほとんど平均値が低く、自己効力感が高い人ほど指導者の権威的行動を好まない傾向にある。選手が理想とするコーチに、権威的行動のような傲慢なコーチを理想とはしていないことが明らかになった。しかし、国際大会に出場している選手に権威的行動を有意に示すことから、国境を超えて戦うようなトップのアスリートたちは多少のコーチの権威的行動が自分を成長させていると感じていることが考えられる。これらの結果により、男性を指導する場合、女性を指導する場合と、いかにコーチが選手1人ひとりに対してコーチング行動を変えて指導していくことが大切だと明確に示された。

5. 卒業論文の執筆を終えて

卒業論文を書き終えて感じたことは、「大変だった」そのひとことに尽きる。この卒業論文は、私が人生で一番パソコンと向き合い、時間をかけて行った研究だった。自分が何を研究しているのか定かでないまま始まり、すぐに中間発表会。そのまま何を研究するのか定かでないままアンケート調査、自分の研究を人にすらすら言えるようになった時にやっと研究の意図が分かるようになっていき、部活動との両立に苦戦し、ハードな執筆だったが、何とか1つの論文として書き上げることができたこと、自分の研究としてこれからも残っていくことで1つの成果を上げることができたことに達成感を抱いている。これまで、アンケート調査にご協力いただいた皆様をはじめ、執筆にあたり手を貸していただいた小笠原先生や院生の方々に感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。